

カキ「早秋」における安定生産のための摘蕾方法

～ 遅れ花を落とす程度の弱い摘蕾が良好 ～

坂野 満（愛知県立農業大学校

前・東三河農林水産事務所農業改良普及課）

【平成26年6月25日掲載】

【要約】

安定した着果量の確保が課題となっているカキ早生品種「早秋」において、落果防止のためのジベレリン処理と組み合わせた摘蕾方法を検討した。結果枝の長さに応じて2～4蕾残す摘蕾は着果が十分確保できず、無摘蕾は果実の大きさのバラツキが大きかった。大きさの揃った果実を確保するためには遅れ花を落とす程度の摘蕾がよいと考えられる。

1 はじめに（目的）

カキ「早秋」は早生の完全甘柿で食味が良好で有望な品種である。しかし、栽培面では着蕾は多いものの、生理落果が激しく安定した着果量の確保が困難となっている。平成23年2月に「早秋」の落花防止を目的に登録拡大されたジベレリンを処理することで、着果量の向上がみられるが十分でない。そこで、ジベレリン処理と組み合わせることを前提に、着果量を確保するための摘蕾方法を検討したので、その効果について紹介する。

2 展示概要、調査方法

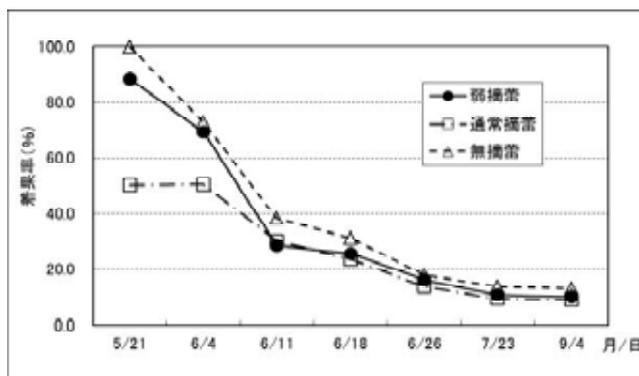
摘蕾は満開期の5月21日に行った。通常摘蕾区は結果枝の長さが40cm以上では1枝4蕾、30cm程度では1枝3蕾、20cm以下では1枝2蕾になるように摘蕾した。弱摘蕾区は遅れ花のみを除去した。なお、摘蕾を行わない無摘蕾区を設けた。満開10日後の6月2日に200ppmのジベレリンをハンドスプレーで結果枝中央の大きな蕾に噴射した（写真1）。調査は5月21日から9月4日までの間、着果数と果実横径を調査した。



写真1 ジベレリン処理方法

3 結果

摘蕾で落とした蕾の割合は、通常摘蕾区は49.6%、弱摘蕾区は11.4%であった。生理落果は、弱摘蕾区と無摘蕾区は6月中旬までは通常摘蕾区より激しく、その後は各区とも緩やかとなり、7月下旬以降は見られなかった。摘蕾する前の着蕾数に対しての着果率は、無摘蕾区が最も高く推移し、弱摘蕾区は無摘蕾区よりもやや低く推移した。通常摘蕾区は最も低く推移した。9月4日の着果率は、無摘蕾区が13.2%、弱摘蕾区が10.1%、通常摘蕾区が9.0%であった（第1図）。カキ栽培において安定的な収量を確保するのに必要な着果数は結果母枝10cm当たり1



第1図 着果率の推移

程度であるが、本試験においては、無摘蕾区が1.28、弱摘蕾区が1.12、通常摘蕾区が0.89であった。

通常の開花期に咲く本花の果実横径は各区とも大きな差がなく推移したが、無摘蕾区は遅れ花の果実横径が小さいため果実の大きさのバラツキが大きかった。

4 まとめ（考察）

通常摘蕾区では生理落果が軽減される傾向があったが、結果母枝10cm当たりの着果数は9月4日時点で0.89と目標の1に満たず、十分な着果量を確保することができなかった。着果量は無摘蕾区で最も多かったが、遅れ花の果実が小さく、果実の大きさのバラツキが大きかった。大きさの揃った果実を省力的に確保するためには、遅れ花を落とす程度の摘蕾が適当と考えられる。